

信州大学工学部 English Cafe に関する報告

English Cafe 運営チーム（*1）

執筆代表 萩原 泰子

1. 本稿の目的と開始の背景

信州大学工学部キャンパスでは、2013年12月から英会話と異文化交流を目的として「English Cafe」を開催している。これは、その場に集まった参加者は英語のみで会話をするという活動で、学生有志を中心に毎週金曜日の2時間、図書館の一角を使用して行っているものである。本稿は、同様の集まりを企画したいと考える人々や団体との情報共有を意図している。また、この活動が持つ社会的意義についても示すものである。

English Cafe 開始の背景には、工学部の環境から生じる三点が大きく関係している。一点目は、English Cafe 開始時には留学生交流サークルがなかったということである。工学部キャンパスは、長野県長野市に位置し、全学部の1年生が学ぶ松本キャンパスからは、公共交通機関で2時間ほどかかる。学部2年生以上の学生数は2,000人強、うち留学生数は約70人と全体に占める割合は大きくない。そのためもあってか、松本キャンパスにあるような留学生と日本人学生の交流を目的とした団体は、以前は存在していなかった。しかし、近年は海外からの研究員や研究生が増えており、工学部の留学生は3年次編入生も多く、所属学科以外の学生と話す機会が少ないため、学科や部署の枠を越えた異文化交流の場がキャンパス内に望まれていた。二点目には、社会的な要請がある。信州大学では2013年度、各キャンパスにグローバルデスク職員が配置され、卒業生・修了生の10%が海外体験を持つことを目標としている。工学系大学出身者の就職先としても海外進出企業が多いため、工学部生には英語スキルと国際感覚を磨くことが望まれている。その一方で、三点目に挙げられるのが、英語意識に関する問題である。信州大学工学部は入学試験に外国語を課さないこともあり、英語に苦手意識を持つ学生が少なくない。つまり、英語の必要性を感じる環境ではありながらも英語学習には前向きになりきれない学生が多い中、English Cafe は始まった。

2. 運営方針と開始の経緯

English Cafe の方針は、「カフェのように誰でも気軽に参加できる」ことである。これは、立ち上げの学生有志が、どのような場にしたいかという方向性を話し合った際の一致した見解である。

そもそも English Cafe の立ち上げは、2013年11月に工学部で行われた留学報告会に端を発する。報告会の後、会場に残った学生同士の雑談から「英語でコミュニケーションする場がほしい」という共通の願望が浮かび上がってきた。無いのであれば自分たちで作ろうと、12月20日(金)に第一回目をトラ

イアル開催した。図書館2階のグループ学習室を使ったこの回は、25名の参加があり、活動の必要性が認識された。2回目以降は、金曜日の12時から14時という活動時間を勘案し、飲食が可能で来館者が必ず通る可視性の高い場所であることを理由に、開催場所を図書館1階入口脇の飲食エリアに移した。2014年12月現在まで、毎週金曜日2時間のこの活動を1年間継続しており、最近では参加者が50名を超えることもあるほどの賑わいを見せている。

3. 運営方法

運営については、図1のとおり学生が主体となっている。大学のサークル申請はしていないため、English Cafe としての予算はないが、運営費は基本的にかかっていない(名札などの消耗品は工学部予算から支出)。また、ミーティングについては、話し合う議題がある際に随時行っているが、定期的には設けていない。通常は、LINEのグループトークを中心に連絡をとっている。

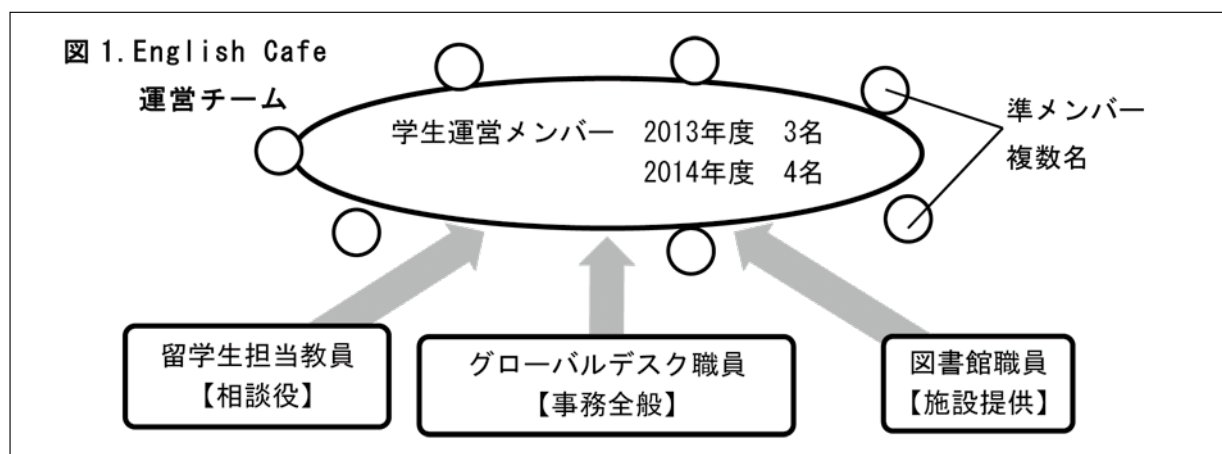


表1. 運営チームの役割分担

学生運営メンバー (準メンバー)	<ul style="list-style-type: none"> ・当日の司会進行 ・プレゼンチェックの準備、立会い ・イベントの企画 ・Facebook (* 2) の管理、更新 ・運営メンバーのスカウト
留学生担当教員	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンチェック
グローバルデスク職員	<ul style="list-style-type: none"> ・当日の受付 ・参加者リスト作成、人数集計 ・開催通知メールの送信 ・ポスター作成、掲示 ・プレゼンの日程調整
図書館職員	<ul style="list-style-type: none"> ・会場準備 ・会場案内の作成、掲示

4. 実施内容

内容としては、Group Talk と 10-minute Presentation、One-to-one Conversation の3つのプログラムをおもに行っている。進行については、表2のとおり(10 min. Presentationがある回の場合)。

表 2. 進行表		担当	
前日 (木)	12:10	プレゼンチェック	留学生担当教員・運営メンバー
当日 (金)	9:00	会場案内設置	図書館職員
	12:00	受付開始 プロジェクター設置	グローバルデスク職員
昼休み	12:10	One-to-one Conversation ペア分け	運営メンバー・準メンバー
		12:25	10 min. Presentation
13:00 迄	終わり次第	Group Talk グループ分け	運営メンバー・準メンバー
	14:00	終了	
	14:00	会場片付け	グローバルデスク職員・図書館職員
	以降	Facebook 更新	運営メンバー

日時：毎週金曜日 12:00～14:00

場所：工学部図書館1階リフレッシュコーナー（飲食エリア）

4-1. Group Talk

5人前後グループで会話する基本プログラム。通常は、30～40分程度でグループの入替えを行なう。トピックは、オリンピックやバレンタインなど、大きな話題や行事がある時はあらかじめ決めることもあるが、基本的には各グループに任せている。また、会話が行き詰まったときのためにトピックカードも用意している。各グループに話を進められる参加者がいるか、日本人が偏り過ぎていないか、などについては、運営メンバーや教職員が配慮し、適宜調整している。

4-2. 10-minute Presentation

発表者が英語で10分間のプレゼンテーションを行うプログラム。発表後は、会場との質疑応答の時間も取られている。発表前日の木曜日にはプレゼンチェックがあり、内容や伝え方について、留学生担当教員から指導を受ける。そのため、発表者にとってはプレゼン力を養う機会にもなっている。

4-3. One-to-one Conversation

ペアを作り、1対1で会話をするプログラム。Group Talk や 10 min. Presentation の前に行い、10～20分後に次のプログラムに移行する。

このプログラムは Group Talk での問題を改善するため、2014年7月に開始した。English Cafe の

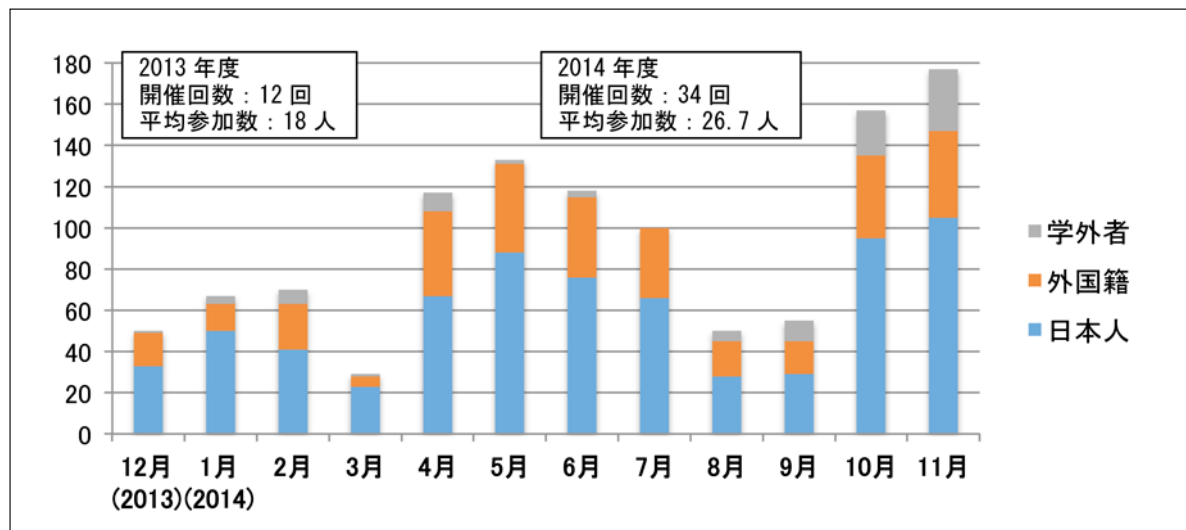
活動を始めてしばらくたった頃、Group Talk では発言者に偏りが見られることが分かってきた。また、日本人のみでグループになると、間違ふことをおそれたり恥ずかしがったりすることから英語を話そうとしないという、日本人特有の英会話に対する後ろ向きな姿勢も目につくようになった。そこで、必ず話す状況を作るためにペアで会話をする One-to-one Conversation を始めた。すると、それまで聞き手に終始していた参加者も発言する機会が増えるという効果があった。また、留学生の活躍も顕著であり、ペアになった日本人参加者の語学力不足を補いつつ、会話が長くようリードし、英語に対する抵抗を下げているように見受けられる。

5. 開催状況(データは2013年12月～2014年11月)

5-1. 参加のべ人数推移(グラフ1)

1年前の初回開催以降、参加人数は増えてきている(2～3月、8～9月は長期休暇)。特に2014年10月以降の大きな伸びは、日本人学生と学外者の増加に起因している。これは、9月に長野 IYEO (長野市の国際交流団体)が English Cafe を開始し、その参加者が工学部の English Cafe に加わるようになったことが要因の一つである。10月以降の学外からの参加者はリタイア後の年代が多く、英会話や異文化交流に加え、世代間交流の場にもなっている。

グラフ1. 参加のべ人数推移

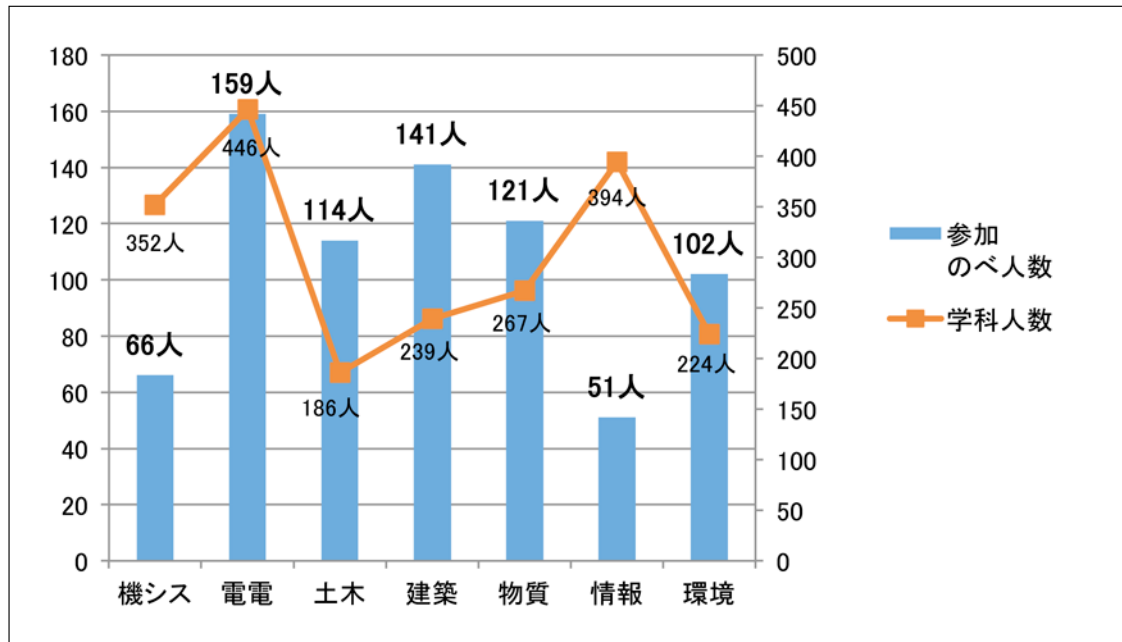


5-2. 学科別参加状況(グラフ2)

学科別の参加のべ人数を見ると、上から電気電子、建築、物質の順になっているが、学生数に対する割合で見ると、土木、建築、環境の順に参加が多いことが分かる。これは、リピーター率が高いことと、その中でも特に留学生が学科内の日本人学生を誘い、その学科の参加者が増えたことが要因である。情報工学科からの参加が少ない理由については、前期の金曜日に2～3限(10:40～12:10, 13:00

～14:30)の2年生必修科目が入っていたことが原因と推測される。同様のことは、他の学科や学年でも起こっている。2013年度はほぼ毎回参加していたが、今年度は授業の関係で来られなくなった学生も少なくない。そのため、今後は開催曜日や時間の選択肢を増やすことも視野に入れていきたい。

グラフ2. 学科別参加状況



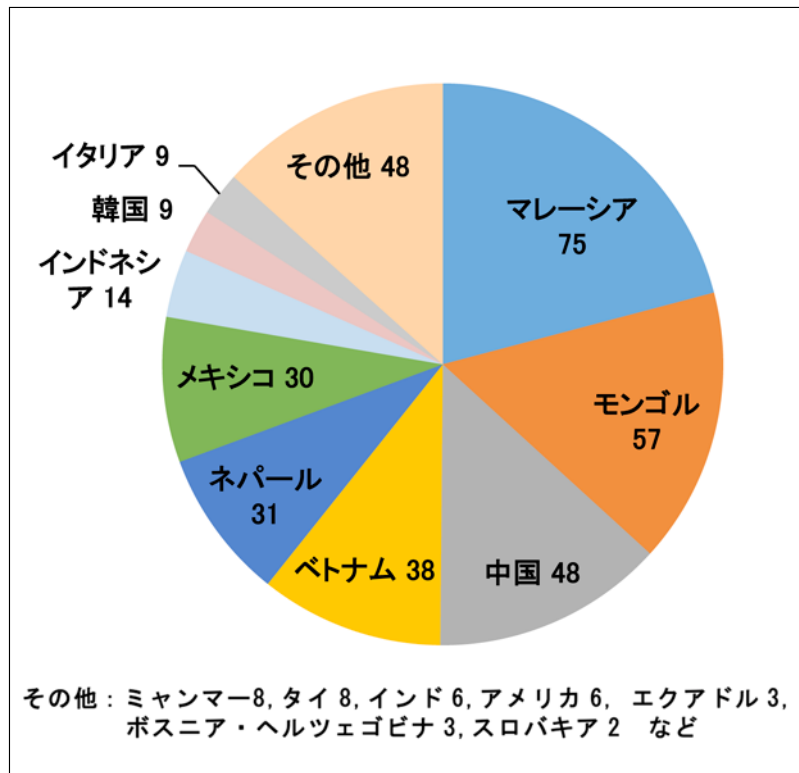
5-3. 国籍別参加割合(グラフ3)

国籍別の参加状況から言えることは、二点ある。

一点目は、English Cafe が、留学生交流に加え、海外からの研究員との交流の場にもなっているということである。工学部キャンパスには、メキシコやインドネシアからの研究員が勤務しているが、これまで彼らとのつながりはなかった。キャンパスにいる構成員が出会う場として機能していることは、評価できる点である。

二点目は、English Cafe に参加することで、10か国以上の異なる文化を持った人々と話ができるということである。これには、留学生や外国籍の教職員に対する留学生担当教員からの働きかけも大きいと考えられる。学生と教職員とが連携することで、有意義な時間と空間を作り出していると言える。

グラフ3. 国籍別参加割合(のべ)



参考) 外国人留学生数

中国	26
ベトナム	12
マレーシア	8
韓国	8
モンゴル	5
ネパール	2
フランス	2
その他	10

6. 成果

6-1. 学習意欲の刺激

English Cafe は、「誰でも」「気軽に」をモットーに、英語をツールとしたコミュニケーションの場を目指しており、正しい文法で文章を組み立てることや高度な単語を使うことには、主眼がおかれていない。そのため、参加することが英語のスキルアップに直結するわけではない。しかし、最初は聞く一方だった参加者が数か月後に話すようになっていたり、お互いに勉強方法の情報交換をしていたり、といった様子が見られることから、英語を使う場があることに対する一定の効果が伺える。また、学生からは国際交流関連イベントの案内、大学側からは留学奨学金の支援制度紹介などが、頻繁に行われるようになってきている。人が集まることにより、学習をサポートする多くの情報が集まり、学習意欲を刺激する場へと発展している様子が見られる。

10 min. Presentation で人気の高い「世界を知ろう」シリーズでは、留学生による出身国の紹介や日本人学生による留学した各国の紹介がされ、知らない国はもちろんのこと、知っている国についても新たな発見がある。そうした観点から、参加者の世界を広げる場にもなっていると見える。(※3)

6-2. 国際交流の促進

English Cafe 開始当時、工学部キャンパスには留学生交流サークルがなかった（2014年12月現在、バスケットボールサークルが一体ある）。全学部の1年生が学ぶ松本キャンパスでそうしたサークルに参加していた学生にとっては、同様の活動を工学部でもしたい、という思いがこれまでもあった。また、日本から海外への留学経験者にとっては、滞在先で体験したような留学生との交流活動を継続できればという思いもあった。このような状況を背景として、English Cafe は工学部の中で留学生と日本人学生とが交流する場としても機能している。今年度は、金曜の2時間を越えて国際交流イベントが企画されるようになり、協働で光芒祭（工学部の文化祭）に出店するなど、学生同士の親睦を深めることに貢献している。

6-3. 他機関への広がりと社会的意義

これまでのところ、長野県短期大学（県短）と長野市の国際交流団体である長野 IYEO にも English Cafe の取り組みを伝え、それぞれで同様の活動が継続している。また、お互いに開催スケジュールを知らせることで、県短の学生や IYEO の参加者が工学部の English Cafe にも訪れるようになってきている（逆もあり）。これには、図書館という誰でも出入りしやすい場所で開催していることの利点が生かされている。幅広い年代に渡って地域からの参加者が増えることで、世代間交流が活発に行われており、ともすれば閉鎖的になりがちな大学生活に対して、社会参加意識や目標、活力を得ることのできる空間を創出している。

7. 課題と解決案

7-1. 英語スキルのレベル調整

現在の English Cafe は、「会話」はできても「議論」はできない、というのが全体的なレベルである。そのため、高度な内容を話題にしたい人や既に一定の英語スキルがある人にとっては、魅力が乏しいと映る傾向がある。そのような人々も含めて、来たいと思えるような場にすることが、今後の課題である。

対策案としては、グループをレベル別に分けるという方法が考えられる。一方で英語力の優劣に関わらず会話に参加することも重要ではある。その中で、ついていけない時には、はっきり分からないと伝え、相手に易しい表現や説明を求めることも現実の環境に対応するために必要な力である。そのため、レベル分けする場合も毎回行うのではなく、月1回で試行するなど、状況に応じて取り入れるのが適切かと思われる。

7-2. 開催状況に関する再検討の必要性

2時間の開催中は出入り自由としているため、参加人数が一定にならない。このことにより、2時間通してプログラムを組立てることが難しいという問題がある。そのため、現在の金曜12～14時に加え、別の曜日や時間の選択肢を増やすことも考慮する。これまでと違う日時に開催することで、授業の関係で来られなかった学生が参加できるようになるという効果も期待できる。一方で運営メンバーの負担

が極端に増えないよう、配慮する必要もある。

7-3. 広報の方法

順調に参加者が伸びている English Cafe ではあるが、キャンパス内に完全に周知されているわけではない。また、知ってはいても一人だと入りにくいという学生もいるようである。こうしたことへの働きかけとしては、二つの案が挙げられている。一つ目は、English Cafe への参加が授業の単位や評価になるという案。二つ目は、生協食堂を限定的に English Cafe にし、英語だけで注文や会話をする「生協ジャック」を行うという案である。前者については、English Cafe の方針にそぐわないのではないかという意見、後者については、みんな黙って食べて帰っていくのではないかという意見も出ているが、いずれも周知させるという点においては、大きな効果があると予想される。

7-4. 運営メンバーの引継ぎ

工学部の履修科目や研究室配属を考慮すると、運営メンバーとしてプレゼンチェックや当日の参加がしやすいのは、3年生が中心になる。とはいえ、後期からは最低一人、2年生が運営メンバーに入ることがのがぞましい。そのことにより、OJT で業務を引継ぐことが可能になる。また、運営メンバーの負担が大きくなることで運営から離れていくことを防ぐためにも、準メンバーの存在を増やしていくことが、重要である。大よそ毎回の参加が見込め、状況を把握している準メンバーが複数名いることで、当日の流れが円滑になることも期待できる。

8. まとめ

本稿では、信州大学工学部で行っている English Cafe の活動について、開始から1年間継続できたことを期に報告をまとめた。

類似の活動は全国で見られるが、本 English Cafe には三つの特徴がある。一つ目は、学生の手によっではじまり、学生、教員、職員が連携して運営されているという点。二つ目は、大学での学生主体の活動でありながら、教職員も学外の人々も気軽に出入りできるという点。三つ目は、従来の英語学習に多い、他から与えられたり、何かを課されたりするのではなく、参加者によって作り出される英語コミュニケーションの場であるという点。これらの特徴が生かされ、毎回一定以上の人数が集まり、英語をツールとして人と関わることを楽しんでいる様子が伺える（時には苦しんでいることもあるが）。

一方で、今回明らかになった課題も多い。解決方法はこれからの活動の中で試行錯誤していくことになるが、継続して課題の存在を意識することが大切だと思われる。

進学や卒業などで運営メンバーも参加者も定期的に変わっていくが、その時々「誰でも」「気軽に」集う場となり、今後もより多くの参加者が英会話と異文化交流に対する意識を刺激し合い、高め合っていくことに貢献したい。

* 1) English Cafe 運営チーム

学生運営メンバー

2013 年度

岩本 舜夫 (情報工学科 4 年)
Santosh Yonjan (土木工学科 4 年)
中島 直弥 (土木工学科 4 年)

2014 年度

岸川 公紀 (土木工学科 3 年)
中村 憲孝 (電気電子工学科 3 年)
平尾 真也 (建築学科 3 年)
Roger Kho Nyet Huang (物質工学科 2 年)

藤田 あき美 (工学基礎教育部門 (留学生担当))
松澤 恵子 (国際交流課グローバルデスク・長野 (工学) キャンパス)
萩原 泰子 (工学部図書館)

* 2) 信州大学工学部 English Cafe Facebook

<https://www.facebook.com/pages/English-Cafe/256177621204537>

* 3) 10-minute Presentation 過去の発表リスト

日付	タイトル	発表者
2013 年 12 月 20 日	モンゴル	Ganchuluun Erdenebat
12 月 27 日	Back Packers の旅	奥山 裕大
2014 年 1 月 10 日	F1 について	中村 憲孝
1 月 24 日	よさこい	飯嶋 浩祐
2 月 7 日	メキシコ	Elda & Miriam
4 月 11 日	ボスニア・ヘルツェゴビナ	Radovan Kukobat
4 月 18 日	KIKKAKE バス東北ボランティア報告	Skip メンバー
5 月 9 日	英語学習に使える 電子ブック・電子ジャーナルについて	萩原 泰子
5 月 16 日	海外における危機管理	降旗 大造
5 月 23 日	ミャンマー	May Hsu Shin

6月6日	モンゴル	Shampan Myeiramyek
6月13日	インドネシア	Austina Dwi Putri Nurul Chotimah
6月20日	マレーシア	Ilyas Bin Ismail Roger Kho Nyet Huang
6月27日	日本	中嶋 洋介
7月11日	愛知県	浦町 美和子
9月5日	太陽エネルギー	Myo Than Htay
9月26日	A Climate Reality Introduction	Chris Clancy
10月3日	Cosmic Calendar and Cosmic Perspective	藤田 あき美
10月10日	ネパール	Santosh Yonjan
10月17日	カンボジア	佐藤 李花
10月24日	ユタ州	岸川 公紀
11月7日	広東	謝 偉峰
11月14日	ブータンの大学生活	豊田 政史
11月21日	イタリア	Maurizio Zucchelli
11月28日	英語は友達	岩本 舜夫
12月5日	マレーシア&UM (University of Malaya)	杉本 拓矢 中村 憲孝
12月12日	Differences between Men and Women	David Ken Asano
12月26日	タイ	Suleeporn Prapapan
(予定) 2015年1月9日	外国人人材の活用について —戦後ブリュッセル首都圏を事例として—	中島 直弥